

堺緞通・敷物

「敷物王国」とも称される堺の敷物産業ですが、その直接的なルーツは、江戸後期の糸物商が手掛けた緞通(だんつう)にあります。一時期は一大輸出産業でもあった、堺緞通・織物の歴史をたどります。

室町時代(1336年～)

応仁・文明の乱(1467～1477年)

応仁の乱で、京都が戦場になり都市機能を失いました。また、それまで遣明船(けんみんせん)の発着港であった兵庫津が西軍に占領されたため、堺津(さかいづ)が遣明船の発着港となり、国際貿易の起点になったのです。その後、南蛮貿易(なんばんぼうえき)により、様々な商品が取引され各種産業が堺を中心に発展してゆくこととなります。

京都・西陣の織物師が、応仁の乱による混乱から逃れて堺にやってきました。同時に貿易によって生糸を入手しやすくなり、堺での織物産業が隆盛に向かったと伝えられています。

江戸時代(1603年～)

戦国期の混乱が収まるにつれ、戦乱を避けて京都から堺に移り住んでいた織物師が帰京し、堺の絹織物は衰退に向かいます。

一方で、堺周辺で木綿の栽培が盛んになると木綿加工品の製造が行われ、堺はその集積地として栄えてきました。

真田紐を製造・販売していた糸物商の糸屋(藤本)庄左衛門(いとやしょうざえもん)が佐賀藩の鍋島緞通(なべしまだんつう)と中国製の敷物を手本に、堺緞通を製造し、販売を始めました。



真田紐(井上修一氏蔵)・写真提供/堺市博物館



江戸時代の堺緞通(木綿製)
代藩真田家(蔵)
・写真提供/堺市博物館

明治前期

明治初期には、糸屋庄左衛門の孫の藤本荘太郎(ふじもとそうたろう)が緞通の製法を改良。明治10年(1877)、東京で開かれた「第一回内国紡業博覧会」に出品したことが、「堺緞通」が世に知られるきっかけとなりました。



「南海鉄道案内」(上巻)・写真提供/堺市立中央図書館

明治中～後期

明治中期には、製造者が急増しアメリカやフランスへの輸出が盛んになりました。しかしながら、高関税や粗悪品の流通もあって明治後期には絨通業者が激減してしまいました。

大正

大正から昭和の初めにかけて全国に洋館が建築されると、羊毛製の毳絨通の需要が増加しました。



大正の毳絨通(羊毛製 旧飯谷邸食堂用)
:写真提供/法政史料館

昭和初期

昭和11年(1936)に完成した国会議事堂にも毳絨通が納められました。



「議事堂御使用敷物」完成記念古写真
:写真提供/堺市博物館

昭和中期

昭和30年ごろには、毳絨通の生産は下火となり、ハンドタフト(フックドラグ)やチューブマットの輸出が盛んに行われました。やがて、ウィルトンカーペットやタフトカーペットの製造が主力となり、高度成長期とも重なって堺は「敷物王国」と呼ばれるほどに成長しました。



輸出用敷物カタログ:写真提供/堺市博物館



国会議事堂の本絨毯(参議院
第一議員階段)
:写真提供/参議院

平成～現在

敷物全般については、新素材の開発やコンピュータ化など製造技術の進歩に伴い、様々なニーズに対応する製品が作られています。機械化により毳絨通の手作業で作られる技術が失われかけましたが、「堺式手織絨通技術保存会」により、現在も技術の伝承が行われています。